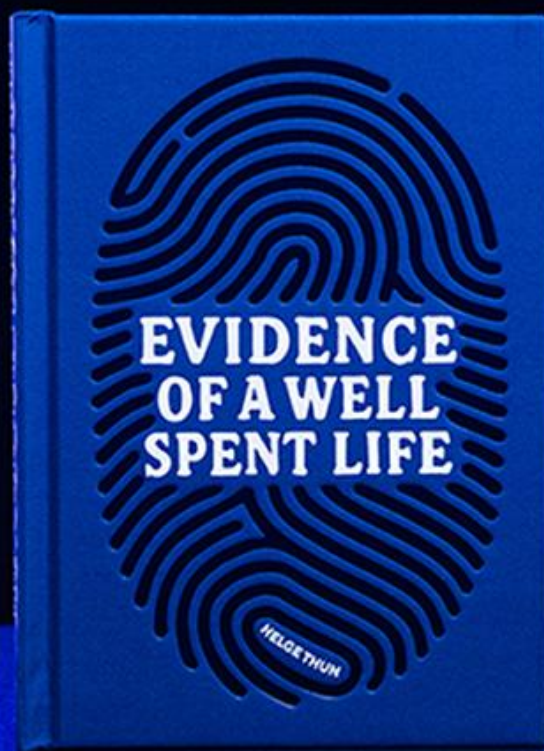


# エビデンス オブ ウエルスペント・ライフ



「実りある人生の証」



EVIDENCE OF A WELL SPENT LIFE

BY HELGE THUN

<日本語解説書>

翻訳：平賀義達

（訳注：この本は、ドイツの一流マジシャンでありコメディアンである Helge Thun のカード作品集です。「我が良き人生の証」というタイトルの通り、この本のルーティンやテクニックは Helge の成功

したマジック人生の成果です。それらは長年磨きあげられてきたものであり、この本を読んですぐに出るといえるものは少ないです。しかし現象は魅力的で、良く考えて構成されたルーティンは一流プロのものであり、そのやり方を知るだけでも勉強になります。

彼の主戦場がパーラーや小劇場なので、それ用の複雑に構成された長いルーティンがメインとなりますが、何段にもわたる手順には感心させられます。ただ、Helge はまたカードテクニシャンでもあり、「こんな難しいことをやらなくてもよいのだが、多くの客の前で成功した時の快感は最高だ」と言っているように、好んで難易度の高いテクニックを使っている節もあり、訳者のようなアベレージマジシャンには厄介な面もあります（動画がいくつかあるので、助かりますが・・・）。

また、中で使われているアイデアには面白いもの、優れたものがあり、読者の手順に組み込めるものが見つかるでしょう。

そして、彼の「客のサインを2回書かせる」原理は、上下のインデックスが異なる Hofzinsler タイプのギミックカードを使うのですが、訳者は見たことがありませんでした。

全体的に少し難しいですが、極めて刺激に富んだ本ですので、じっくりお楽しみください)



## 目次一覧

Foreword- Guy Hollingworth	序文 - ガイ・ホリングワース	-----4
Introduction - Helge Thun	はじめに - ヘルゲ・トゥーン	-----5
<b>Chapter 1: Single Cards</b>	<b>第1章：単一カード</b>	<b>-----6</b>
Instant Camera Card	インスタントカメラカード	-----6
Bulkoki Reloaded	プルコギ・リローデッド	-----8
Humor as Deception	ユーモアを欺瞞に	-----11
<b>Chapter 2: Technique</b>	<b>第2章：テクニック</b>	<b>-----14</b>
Action Fan Palm	アクション・ファンパーム	-----14
The Bent Cop Transfer	ベント・コップ・トランスファー	-----15

Card in Matchbox - Three Loading Methods

カード・イン・マッチボックス - 三つのローディング法	-----	16
Hands up!	手を上げろ!	-----18

**Chapter 3: Beauty of Complexity 第3章：複雑さの美** -----19

Better Safe than Sorry 3	用心に越したことはない 3	-----20
Essay:Strangers or Friends?	エッセイ：他人のまま?	-----26
The Flying Four	空飛ぶ 4 枚	-----28
Eight Ahead!	8 枚先読み!	-----30
Pockets Full of Presents	ポケットいっぱいのプレゼント	-----35

**Chapter 4: The Duplicate Principle 第4章：複製原理** -----42

The Signatures	署名・サイン	-----42
4 Card Brainwave	サインカード 4 枚のブレインウェーブ	-----44
Free Choice	フリーチョイス感覚の選択	-----46
Cornererd	コーナを活かす	-----47
Round the Corner	コーナーからの脱出	-----49
Filling the Gap	破り取ったコーナーの復活	-----49
The Cloth of Death	死の布 (デビルハンカチ)	-----51
Duplicate Travelers	複製サインカードの飛行	-----55
Boxed	箱詰め	-----63

**Chapter 5: Encore 第5章：アンコール** -----68

Clear Voyage	クリア・ヴォヤージュ	-----69
--------------	------------	---------

## 序文（要約）

私は時々、本の前書きを依頼されますが、ほとんど受けません。それは著者の事をよく知らなかったり、単に時間が無かったりですが、基本的には私のような者が受けるべき仕事ではないと思っているからです。

ですから Helge が光栄にもこの本の原稿を送って来てくれた時にもどうするか迷いましたが、Helge は彼一流の洞察力と計画性をもって、十分な執筆期間を設定してきたのです。さらに、私は彼を30年前から知っているのです。昔、ロンドンで「THE INTERNATIONAL MAGIC CONVENTION」があった時に、英語を我々より正確に話すドイツ人の若いマジシャンのグループがいたのです。彼らは皆、私が好むタイプのマジックを演じていましたが、その中にいたのが Helge であり、私達は親しくなったのです。という訳で、前書きを断る理由がなくなりましたが、最後に1つ問題が残っていました。

彼はドイツ人なのです。

先の大戦では敵国同士だったのです。でもそれももう80年も前の話であり、私は熟考した結果、そういう過去はもう置き去る時期がきたのだと寛大な心で決めたのです。

*（ああ、皆さん、ここは真剣にとらないでくださいよ。話を面白くするためのユーモアのつもりなので。イギリスの有名なコメディ番組「Fawlty Towers」の「THE GERMANS」というエピソードを思い出してください。そこでもきわどいやりとりがありますが、すべては相互理解と友情で許され楽しい話になっていました。私もそれと同じ「のり」で、ユーモラスな話にしたいと思って、上記のように書いていただけですので！ドイツ人の友人は沢山います）*

そこで私は原稿を読みましたが、私が思っていた以上に共通点があることが分かりました。例えば、第3章には「26」という数字が Helge には特別な意味があることが書かれています。彼はアパートの「26号室」に住んでいたのです。実は私もなんと「26号室」に住んでいたのです（誤解がないように言っておきますが、アパートは同じではありませんからね）

彼が「はじめに」で書いているように、この本のルーティンはパーラーや小劇場向きの複雑に構成された長い物がメインです。クローズアップや「WALK-AROUND」（歩き回って演じる）の環境向けには、本に解説されるものもマジックマーケットの商品も単発の比較的短いものが多いことを考えると、こうした何段にもわたるルーティンは貴重だと言えます。

また、もし客がサインしたカードが2枚使えたら何が出来るかという課題についても共通の熱い興味を持っていることが分かりました。私が「偽」のサインを使うのに対して、Helge は本物の2つのサインを使うよく考えられた巧妙な方法を考えました。そして、本書の第4章をすべてその話題に費やしています。さらに、第5章において、同じ結果を得るための新しいやり方を提案しています。

しかし、そうした複雑なルーティンだけでなく、第1章、第2章においては単発の面白いトリックや、新しいテクニックも紹介しています。特に、「BETTER SAFE THAN SORRY 3」での輪ゴムの扱いはとても有益なものです。

さらに、彼が私の本にある、他の人があまり顧みてくれない私のテクニックのいくつかを本書で使ってくれているのを発見し、とても光栄に思いました。私に「前書き」を書かせるために、彼が私のテクニックをわざわざ使ったのではないかとさえ思うほどです。もっと適切なテクニックがあったと思うので

すが、それでもうれしい事です。

彼の演技を見た人は、彼が客に対して丁寧に接すると同時に、要所要所ではユーモラスなセリフ、ジョークを口にするのに気づいているでしょう。こうした客のマネジメントも本書の中で語られており、ステージパフォーマーならずとも参考になります。

私に言わせれば、彼は最も「BRITISH な GERMAN」であり、この本には彼の魅力、ウィット、オリジナリティ、知性があふれていると言えます。

2025年4月21日 LONDON にて

Guy Hollingworth

## はじめに（要約）

私の名前は Helge で、この本を書き始めた時は52歳でした。プレイングカードの枚数と同じなのは悪くないと思いますし、まだこの後も余分な JOKER YEAR が続くことを期待できます。この本のトリックはすべてカードトリックですが、それぞれに生まれてからの成長過程が異なります。あるものは生まれてからすぐに一人立ちして歩き始めましたが、あるものはその後多くの実践の中で育ち、最終的にその価値が分かるまでに30年かかったものもあります。人と同じく、多種多様です。

私が好きな演技環境というのは、60～100人位が入る客席が階段状になった小さい劇場です。つまり、ステージからパーラー、クローズアップまで行える環境です。そこでは私の好きなトリックを演じ、練習通りのショーではなく、毎晩違った経験をしたいのです。たとえカード1枚でもそれを介して客に接近し、やり取りする楽しみがあるのです。

この本のすべてのトリックは、そのような目的に適したものです。

それらの主要なテーマは、「客にサインされたカード」と「サインされたカードを使うしっかりしたルーティン」です。

というのも、私は自分の経験から、「思ったカードを当てる」とか「何段階かの OIL & WATER」よりも、「客のカードが IMPOSSIBLE LOCATION（思っても見なかった所）から現れる」トリックの方がはるかに客に感銘を与えていると思っています。したがって、この本のトリックでも客のサインしたカードを使った「IMPOSSIBLE LOCATION」ものがいくつもあります。

また、「しっかりしたカードルーティン」と言うのは、劇場でのパーラーショーでも使えるルーティンであり、クローズアップや「WALK-AROUND」（歩き回って行く）の環境のためのカードトリックとは一味違うものです。後者はどうしても、「短くダイレクト」なものが多くなります。私の好みの問題もあるのかもしれませんが、私はどちらかと言うと「CUP & BALLS」のようなカードルーティンをやりたいのです。

マジックの古典である「CUPS & BALLS」には、何場面から成る劇のような趣があります。単にボールが消えてカップの下から現れるだけでなく、いくつかの不思議な現象がスムーズにつながって最後には意外な物の出現となります。こうした構成と複雑さを持った他のマジックはなかなかないと思うのです。カードで出来るそのようなルーティンが私の求めているものであり、この本にもそうしたものがいくつかあります。

そうは言っても、この本の最初の章ではオープナーとして比較的短いトリックも取り上げています。そして、章が進むにつれてルーティンの複雑さが増すような構成になっています。では、まずはウォームアップとして、1枚のカードに焦点を当てた簡単でダイレクトなエフェクトを2つ第1章で学びましょう。

それらがあなたの気に入ることを望んでいます。もし気に入っていただけたら、またその次の章でお会いしましょう。

## Chapter 1: Single Cards

## 第1章：単一カード

### INSTANT CAMERA CARD: インスタントカメラカード

スマートホンよりもずっと以前に、カメラ機能を備えたデッキがあるなどと誰が考えたでしょうか？私と友人の Thomas Fraps が考えました。でも、そのアイデアを私がそれから30年間も演じ続けて、1991年のFISMでも演じることになるとは誰が想像したでしょうか？

#### (現象)

客のサインしたカードを探す代わりに、マジシャンはデッキに組み込まれたインスタントカメラの機能で客の心の中を写します。一瞬の後に客のカードのイメージが現像されます。もちろん、客のサインもハッキリ写っています。

#### (準備)

まずは、後でインスタントカメラとして使うためにカードケースに加工が必要ですが、とても簡単に出来ます。後は、1枚のブランクフェースカード（以下BFカード）、もう1つのカードケース、糊、ハサミが必要です。

#### —以下省略—

#### (やり方)

カードケースからデッキを取り出したら、ケースは脇にどけて置きますが、その時にギミックとゼロハンをわずかに下に引いておきます。これは後で客のカードをギミックの下に入れやすくするためです。

ケースを脇に置いたら、デッキから客にカードを1枚選ばせ、サインさせます。

#### —以下省略—

## **BULKOKI RELOADED**:プルコギ・リローデッド

(訳注:「BULKOKI」はまさに焼き肉料理の「プルコギ」ですが、タイトルの意味は分かりません)

### (現象)

少額紙幣が高額紙幣に変化しますが、消えた少額紙幣はカードケースの中の客のカードに巻き付いているのです。

(補足:「私はこのトリックをもう30年にわたって主にステージで演じて来ました。それは単純で分かり易い現象であり、最後尾の観客にも理解できるものですし、コメディの要素も持っています。それは Oliver Erens の本「CONCERTOS FOR PASTEBOARDS」(2000年)に英語では初めて発表されました。それ以来、サトルティーや心理的面の改良を加えましたが、それについてはこのトリックの解説の後にエッセイ「HUMOR AS DECEPTION」として書いておきます。きっと読者の時間を無駄にはしないと思いますので、読んでください」

### (準備)

プレイングカードに巻き付けられる大きさの少額紙幣を用意します。ヨーロッパでは20ユーロであり、アメリカでは10ドル紙幣が良いです(日本では千円でしょう)。まず、紙幣をテーブルに置いたら、そのシリアル番号を覚えます。これは覚えやすい番号の紙幣を選べばよいです。

任意の1枚のカードを19頁の図1のように、紙幣の中央に置きます。そして、紙幣の両端をカードの上に折りたたみますが、左側から折ります。

## —以下省略—

### (やり方)

まずデッキから客にカードを1枚選ばせて、サインをさせます。その間に、マジシャンは左内ポケットからセットしたカードケースを右手で取り出し、左手のディーリングポジションに持ったデッキのトップに置きます。輪ゴムを外して1人の客に渡して調べさせ、次にカードケースを別な客に渡して調べさせます。これで、3枚のサンドイッチカードが密かにデッキのトップに加えられました。

## —以下省略—

## HUMOR AS DECEPTION: ユーモアを欺瞞に

きっとあなたは、私が紙幣のシリアル番号をミスコールするだけで、紙幣のコーナーを破って後で紙幣の身元を証明するために使うという、よく行われるやりかたをなぜしないのかと知っていることでしょう。私は、そのやり方がうまくいくのは時と場合によると考えています。

### ・コーナーを破ることの弱点

私は、このやり方の問題点は、そうすることで「紙幣が何かに使われて、最後に間違いなく元の紙幣であることを確認するために破くのだな」と観客に思わせてしまうケースが多いことです。あるいは、多くのマジシャンがそうするので別のショーの中で見た人も客の中にはいるでしょう。

そのため観客は客の紙幣に何が起こるか、より一層注意を集中することになります。その結果、完全にはないにせよトリックのやり方を思いつく客もいない訳ではないのです。

一方、単にシリアル番号をミスコールするだけでも十分にその目的を果たすには、それなりの雰囲気づくりが要ります。

### ・ユーモアはとてもディセプティブ（騙される）なテクニックとなり得る

まず客から紙幣を借りる時は、出来るだけ後ろの客から借りるようにします。もし、最前列の客がポケットに手を入れようとしたら、すぐに客席の通路を後ろに向かって歩きだします。「前列の方とはいつも顔を見ているので、今度は後ろの席の方の顔を見に行ってきます」などと言います。

紙幣を借りてステージに戻ったら、思いついたように自分の紙幣のシリアル番号を覚えているかと聞きます。通常は覚えていないので、「なんだ、覚えていれば、その紙幣に何かあった時には銀行に行けば、払い戻しが受けられたのに！」と言います。前列の人に、「そうですね？」などと確認しても面白いかもしれません。これは古いギャグですが、ここではシリアル番号を記憶すべき「阿保らしい」理由を提供して、場を和ませます。観客は、これはギャグだと分かっており、トリック自体に重大な関係はないと思います。観客は笑いますが、笑っている人にものを深く考えている人はいないのです。

ここで紙幣の番号をマジシャンが読み上げるのですが、紙幣の持ち主は客席の後部の客なので自分で読むわけにはいかないからです。これが、前列の客から紙幣を借りない理由です。

## —以下省略—

### ・シリアル番号で客とのやり取りを楽しむ

## —以下省略—

### ・一石三鳥

## —以下省略—

## ・高額紙幣への変化の場面

ここで、読者の好きな方法で、少額紙幣を高額紙幣に変えてください。

さあ、このトリックの最高の瞬間がやって来ます。マジシャンは客席の後部に行って、少額紙幣を借りた客に変化後的高額紙幣を返すのです。「おめでとうございます」と言ったら、後は何も言わずにステージに静かに戻って行きます。

この間、観客の心には次のような思いが浮かぶでしょう；「なんてこった！マジシャンは本当に高額紙幣を客に渡したぞ。私が紙幣を渡していたら、どうなったんだ？」

こうした感情は、おそらく本当のマジックを目撃した時の感情でしょう。「お金を増やして、客にあげた」のです！

マジシャンはステージに戻ったら、観客の驚きと妬み、欲が入り混じった反応を楽しむかのように微笑んでながめます。時には、「ここにも少額紙幣はあるぞ！」などと言う人さえ出て来るかもしれません。また、より高額な紙幣を取り出す人がいたら、「欲」が見え見えて笑いが起こるでしょう。

ここで、高額紙幣を渡した客に向かって、「誰も信じないようなことが起こりましたね。念のために渡した紙幣のシリアル番号の始めの部分を読んで見てくださいか？」とまじめな調子で言います。

観客の心の中には、「まさか。シリアル番号が一致するのでは？」という期待感も浮かびます。

—以下省略—

## ・重要な事

—以下省略—

## ・より重要な事

—以下省略—

しかし、シリアル番号を持ち出す真の目的は、客のカードと共に不可能な場所から現れる紙幣を確認することなのです。観客はまさか客の紙幣がカードケースの中から、客のカードに巻き付いて現れるとは予想もしていないので、その紙幣の番号が「PG274」であることを知らされて、頭が真っ白になるわけです。これがシリアル番号を持ち出す最も重要な理由です。

こうして、ここではユーモアやジョークが秘密を隠すカバーとして使われているのです。

紙幣を確認するためにコーナーを破るよりも、上記のやり方の方がはるかに良いと私は思っています。

—以下省略—

